

The Cambridge Gazette: Lessons Learned

For Young Samurais in the Age of Globalization and the Internet

『ケンブリッジ・ガゼット: Lessons Learned』
第 10 号 (2007 年 3 月)

ハーバード大学
ケネディ・スクール
シニア・フェロー 栗原 潤

グローバル時代における知的武者修行を目指す若人に贈る栗原航海(後悔)日誌@Harvard

今月号の目次

1. 旧正月明けのケンブリッジより
2. 栗原後悔日誌@Harvard
3. 日欧関係 憧れと無関心を超えて
欧州史: 「知」と「血」が交錯した記録
「不思議な片思い」の関係
憧れと無関心を超えて
4. 編集後記

1. 旧正月明けのケンブリッジより

中華圏では長期休暇となる旧正月(春節/春節)の期間中、私は過去3年間で初めてケンブリッジから離れて一時帰国をしておりました。そのため、春節を祝う餃子を中国の友人からご馳走になる機会を逃したことを残念に思いつつ、2月24日に梅の花が咲き始めて春が近づいた日本を離れ、未だ摂氏零度近いニューイングランドに到着しました。こうして道路が凍り付いている旧正月明けのケンブリッジより、高い「志」を抱く有能な若人の方々のメッセージをお送り致します。

2. 栗原後悔日誌@Harvard

小誌先月号で触れたイスラエル出張中、駐日スウェーデン大使館から電子メールが届きました。内容は、2月中旬に東京で開催される会議(“The New Japan”)に関する問合せでした。この会議は北欧の財界の方々が経済交流促進を目的として来日するのを機会に開かれたもので、野村ホールディングスの氏家純一社長や一橋大学の石倉洋子教授をはじめとする方々と共に講演しました。さて、丁度一年

前、*The Cambridge Gazette* 昨年3月号で、本学出身で日本銀行の平野英治理事が本学のビジネス・スクール(HBS)、ロー・スクール(HLS)、そして本校(KSG)が共催した Asian Business Conference (ABC)で講演するため、本学を訪問されたことをご紹介しました。昨年後半から平野氏がトヨタのファイナンシャルサービス株式会社に移られたので、私は自由なお立場から同氏にこの会議で積極的な発言をして頂きたいとお願いしたところ、ご快諾頂きました。こうして、親しい方と一緒に参加することができ、リラックスしつつ会合やステファン・ノレーン駐日大使主催の宴席で会話を楽しみました。が、北欧経済のことをほとんど知らない上に粗忽者の私ですから、会議では私の知らないうちに礼を失したのではと、今になって恥ずかしくなっています。

スウェーデンと言えばノーベル賞を思い浮かべる方が多いと思います。フロリダ州オーランド郊外のウィンター・パークに在る同州最古の大学ロリズ・カレッジは、ハーバード大学と比較しますと小規模ですが、1987年にノーベル化学賞を受賞したドナルド・クラム博士が卒業された南部の名門校です。学生の大半は米国南部の優秀で裕福な子女で、留学生はそのほとんどが欧州及びラテン・アメリカ出身です。しかし、昨年、同大学の卒業生が多額の寄付を行い、中国研究センターを設立しました。これを記念して国際会議を開催する旨、我が研究センター(M-RCBG)の元フェローで、スイス出身のマーク・フェチェリン氏が昨年夏、本校に連絡して来た結果、私が参加することになりました。そして約3ヵ月前の昨年12月初旬、中国系企業のグローバル戦略に関する会議(“The Globalization of

Chinese Enterprises”)に出席し、講演を行いました。因みにウィンター・パークは、地名から推測される如く、避寒地としてマサチューセッツ州の富裕層が19世紀末に造った街です。また、*The Cambridge Gazette*の一昨年7月号で紹介したフェチェリン氏は才能と共に溜息が出るような境遇に恵まれた人で、レマン湖のほとりにプライベート・ビーチを持ち、また家族としての葡萄畑及びワイン・レーベルを所有する裕福な家庭の出身です。また、共に過ごしたM-RCBG時代は記憶に残る出来事ばかりでした—同氏の伯父様は駐スウェーデン大使及び駐韓国大使を経験した外交官であったため、伯父様から聞いた世界の興味深い話を、また欧州の香りをプンプンさせるブロンドのドイツ美人であるハイティの話をつっぷり聞かせてもらったものでした。昨年12月の国際会議では、この優秀な「ボンボン」フェチェリン氏と一緒に時を過ごしましたが、その時、彼は私に向かって、「夏、ドイツのノーファーでハイティと結婚式を挙げるけど、ジュンを招待するから、ドイツ・スイスへの旅行のために日程を空けておいてね」と言いました。そして今、この友人からの夏のプレゼントを心待ちにしつつも、錆びついた私のドイツ語に慌てて油を挿しつつ、日頃の努力不足を後悔している次第です。

若くて有能な皆様のなかには、欧州を旅行し、更には生活した経験をお持ちの方もいらっしゃると思います。残念ながら私は欧州に住んだ経験がありません。従って欧州について皆様に適切な助言を差し上げる資格は持っていません。ただ、グローバル時代を迎えて、米国東海岸に居る一人の日本人が抱いた欧州観のなかに皆様にとって少しでも役立つ部分があればと願いつつ記したいと思います。限られた範囲ですが私は仕事や旅行で訪欧経験を持っています。また*The Gazette*で時折触れましたが、本学の欧州問題研究所(CES)やボストン大学の人間科学研究所(IHS)等が開催する欧州関連の会合に頻繁に参加してまいりました。そうした経験から、グローバル化の深

化に直面している日本は欧州との関係を改めて考える時期を迎えたと感じております。

仕事上、フランス語よりもむしろ中国語を使用する機会が多くなった私は、時にはフランスのことを考えていたいと、シャンゼリゼを「香榭麗舍大道」、オルセー美術館を「奥塞博物館」、そしてワインの「ロマネ・コンティ」を「罗曼尼・康帝」として記憶しております。この私の姿を見て本校の友人は微笑みながら、「ジュン、そんな中国語を憶えてどうするの？ 使うことは滅多にないんじゃないの？」と私をからかっています。私はそれに対して、「将来、尊敬する中国の友人とシャンゼリゼを散歩し、『ミシュラン』の三ツ星レストランで美味しいお料理とワインを満喫する日が来るかも知れないよ!」と反論しています。実際、2003年に私はベルギーのブリッセルで、当時研修中の中国高級官僚の卵である友人と会食した経験があります。その時はベルギーが誇るレストラン「コム・シェ・ソワ」ではありませんでしたが、友人と2人で中欧間の貿易摩擦や、中国人が抱くオックスフォード大学(牛津大学)とケンブリッジ大学(剑桥大学)の印象を、シーフードと辛口白ワインを楽しみつつ語り合いました。その時、友人に向かって私は、「君は、将来、中国のエリートとして、欧州の人々と伍して厳しい議論を戦わせることになるでしょう。そうすれば当然のこととして彼等との会食の機会も増えることでしょう」と言いつつ、レストランで必要とされる最小限のフランス語と西洋式のテーブル・マナーについて語りました。こう考えますと、現在は本校の友人にからかわれていますが、中国の台頭とグローバル化の進展で、私の努力は将来必ず報われると信じております。

3. 日欧関係 憧れと無関心を超えて

こうして今月のテーマは「日欧関係 憧れと無関心を超えて」です。先取りして結論を申し上げますと次の通りです。グローバルゼ

ーションが深化するなか、太平洋戦争後、地政学的には遠かった欧州との関係を見直す時期が来た。すなわち、中国の台頭、ロシアの復活を巡って問題化した国際間の制度調整、環境問題における米欧間の主導権争い等、欧州諸国との協調・協力体制を再編・強化する時期が到来したのである。しかし欧州は多様性のなかに統一性を持ち、国境を超えた知的対話と同時に血生臭い戦争が間断無く繰り返された地域であり、双方向の知的対話が希薄であると同時に激しい戦いも経験しなかった東洋とは対照的な形の長い歴史を持つ国々の集合体である。従って我々はそのことを十分理解した上で、欧州との関係を再考すべきである。また、米国やアジア諸国に比べると地理的に離れているが故に、文化的な憧れや片思いに近い感情を抱く日本人と、極東に関心を持つ極く少数の人々を除き、日本人に無関心な圧倒的多数の欧州人とが「すれ違い」の状況になっていることも否めない。21世紀初頭において、こうした我々の憧れと彼等の無関心という「すれ違い」を超えて、我々は互いの国益を見据えて政治経済的な協調・協力関係を摸索し、共通する価値観の確認と、異なる価値観の存在を認め合い、尊敬し合う精神を築きあげることが重要である。このためにも、我々はこれまで以上に意識的に欧州情勢を学ぶと共に双方向の知的対話を行わなくてはならない。以上が今月の話題です。

欧州史：「知」と「血」が交錯した記録

小誌新年号「アジア、多様性と統一性との狭間で」の中で、アジアは欧州に比して「志」が高く才能のある人々が相互に影響を与え、友好的に競い合う「場・方法」が極めて限られてきたと申し上げました。その時に3月号でこれについて詳述すると申し上げました。慧眼な皆様に改めてご説明する必要は無いと思いますが、ここで、それを概観してみたいと思います。すなわち、欧州は歴史的にみて、①古代においてはギリシア・ローマ文明、②中世においてはキリスト教文明、③近世にお

いてはルネサンス文明と宗教改革、④ウェストファリア条約以降の近代においては主権国家の形成と資本主義の発達と、現代欧州政治の国境を超えた形で「志」が高く才能の有る「ヒト」が相互に影響を与え、また競い合う「場」が提供され、「方法」が検討されてきました。ここで私が念頭にしている「場」とは、例えば大学やアカデミーといった学術組織であり、「手段」とは、例えばラテン語といった共通言語、16世紀のクリストフ・プラントンを代表とする印刷業者、そしてロンドン王立協会の『哲学会報(Philosophical Transactions)』に代表される学術雑誌を指しています。

紙面の制約と私の能力の限界から詳述することは不可能ですが、具体例を幾つか挙げてみます。①古代において、アレキサンダー大王やシーザー等による広大な地域による支配地の拡大と共にギリシア・ローマの文化が空間的に広がりました。②中世において、イスラム諸国やビザンチン帝国に圧倒された時期もありましたが、キリスト教が基軸として働き、教皇権力の強化や欧州からのイスラム勢力の駆逐(Reconquista)等を経て欧州としての一体感が強化されました。この時期、欧州に大学が次々と設立されます。最古の大学であるボローニャ大学(1088年創立)をはじめ、パリ大学やオックスフォード大学が設立されたのも中世でした。③近世において、ペトルカ、エラスムス、モンテーニュといったユマニスト達がラテン語を媒体として国境を超えて知的対話を行いました。また、ルネサンス期の紳士淑女の指南書であるカスティリオーネの『宮廷人(Il cortegiano)』は、西仏羅英独、更にはポーランド語にまで訳されて全欧州に広まりました。④近代に入りますと直接的で双方向の知的対話は一層活発になります。実際に直接的な知的対話があったかどうかは別として、大天才同士が極めて近い場所で生活していたという面白い史実があります。小誌創刊号で触れたノルウェーの天才数学者アーベルは、1818年、ベルリン留学中、大哲学者ヘーゲルと同じ下宿で過ごしました。当時

16歳のアーベルは下宿で相当はしゃいだらしく、ヘーゲル先生を怒らせたようです。大哲学者フィヒテの死後、4年間空席となっていたベルリン大学哲学講座の教授に就任して「さあ、これから」とやる気に満ちた48歳のヘーゲル先生は一体どんな輩が騒いでいるのかと思ったことでしょう。周囲の人が(間違いですが)アーベル少年を「デンマーク人ですよ」と言ったところ、ヘーゲル先生は、「デンマーク人じゃない。粗野なロシア人の輩に決まっている(„Nicht Dänen, es sind russische Bären.“)」と先生らしくないお言葉を吐いたという逸話が残っており、私はそれを知った時思わず吹き出すと共に、欧州に広がる直接的な知的対話の可能性に感銘を受けた次第です。

小誌昨年9月号で、私は、ゲーテ、ヴォルテール、シェイクスピアをまとめて、「ゲヴォシェイク(GoeVoShake)」と呼んで楽しんでいることを申し上げました。シェイクスピア(1564~1616)は近世の人ですから、近代に生きたヴォルテール(1694~1778)やゲーテ(1749~1832)との双方向の対話は不可能でしたが、この仏独両国の大天才が抱いた英国の文豪に対する思い入れには各々スタイルが違うものの凄いいろがあります。ゲーテは、「魅力が無限のシェイクスピア(„Shakespeare und kein Ende“)」の中で、小誌昨年12月号でご紹介した福田恒存氏の主張と同様のことを述べています。すなわち、「シェイクスピアは生き生きした言葉によって効果をあげている。そして、その効果は朗読の際に最も良く発揮される。聴き手は演出の良し悪しによって気を散らされることがないからである。シェイクスピアの作品が自然な正しい発声で大げさにならないように朗読されるのを、目を閉じて聴くことほど高尚で純粋な楽しみはない(Durchs lebendige Wort wirkt Shakespeare, und dies lässt sich beim Vorlesen am besten überliefern; der Hörer wird nicht zerstreut, weder durch schickliche noch unschickliche Darstellung. Es gibt keinen höhern Genuss und keinen reinern, als sich mit geschlossnen Augen durch eine

natürlich richtige Stimme ein Shakespearesches Stück nicht declamieren, sondern recitieren zu lassen.)」と、シェイクスピア文学のリズム感の素晴らしさを称えています。一方、ヴォルテールは、ゲーテとは反対にシェイクスピア劇の真髄に触れるならば、英語にこだわらず、翻訳される国の言葉で素晴らしさを語らなくてはならないと主張します。すなわち、『哲学書簡(Lettres philosophiques sur l'Angleterre)』の中で、「私がこの翻訳で英語を一語一語直訳したとは思わないでほしい。文句をいちいち直訳して、原意を弱めてしまう逐語訳をする者に呪いあれ。こんな場合にこそ、文字は殺し、精神は活を入れる、ということが出来るのだ(Ne croyez pas que j'aie rendu ici l'anglais mot pour mot; malheur aux faiseurs de traductions littérales, qui, traduisant chaque parole, énervent le sens! C'est bien là qu'on peut dire que la lettre tue, et que l'esprit vivifie.)」と、ヴォルテールはシェイクスピア文学に潜む精神の大切さを強調しております。いずれにせよ、英国文化が国境を超え、独仏の文化を揺り動かしたことは間違いのないように思えます。

この例を挙げた時、慧眼の皆様はすぐ疑問に持たれると思います。「そんな例なら、日本と中国との関係でも有るではないか」と。確かにその通りです。徳川光圀が明朝末期の儒者である朱舜水の助言で中国の教えに従って小石川の作園の際に「後樂園」と名付けた例や、幕末の志士橋本左内が中国宋の武将岳飛を景慕して自ら景岳と号した例が有ることは皆様ご承知の通りです。しかしながら、紙面の制約と、厳密な定量的比較が分析上難しいが故に結論だけ申し上げて恐縮ですが、知的対話を「双方向」という視点で評価した時、欧州での知的対話は「双方向」であったのに対し、東洋では中国から日本を含む周辺諸国への「一方通行」型の知識の流れが支配的だったと私は理解しております。

繰り返しになりますが、欧州における双方向の知的対話は地理的に広範で、歴史的にも

長いものです。ご関心が有る方はご自身で、本学創立の1636年、ホッブスがガリレオに会いにイタリアを訪問したことや、デカルトが1649年、女王の招聘を受けてスウェーデン王国に移り、翌年その地で永眠したこと等を学んで頂きたいと思います。こうした歴史のなかで、私にとって最も印象深いのはナポレオン皇帝とゲーテとの直接対話です。ゲーテは、1808年10月2日に皇帝に接見したことを「ナポレオン会見記(„Unterredung mit Napoleon“)として綴っています。しかもこの会見は決して「形式的」ではなく、皇帝と文豪との質の高い知的対話でありました。すなわち、「皇帝は、彼が徹底的に研究したという『ヴェルテル』に話を移した。まったく正鵠を射た評価をいくつか述べた後に、或る箇所を指摘し、『何故、貴方はあのように書いたのですか。あそこはどうも不自然ですね』と皇帝は尋ねた。皇帝は細かくこの点を説明したが、それは完全に非の打ち所の無いものであった(Er wandte sodann das Gespräch auf den Werther, den er durch und durch mochte studiert haben. Nach verschiedenen ganz richtigen Beobachtungen bezeichnete er eine gewisse Stelle und sagte: „warum habt ihr das getan? es ist nicht naturgemäß“ welches er weitläufig und vollkommen richtig auseinander setzte.)」、と。皆様、フランス皇帝がドイツの文豪に直接会い、彼の小説に関して自分の疑問点を率直に語り、それに対して文豪が納得するという光景を想像しただけで、西洋と東洋、彼我の大きな違いを感じるではありませんか。

こうして私は欧州の地理的に広範な、また歴史的に長い双方向の知的対話に対して感銘を受けると共に尊敬の念を抱いております。そして、小誌前号で触れた王陽明の有名な言葉「數學(コウガク)は相い長ず」と同様の言葉である「教えることこそ、学ぶことである(homines, dum docent, discunt./While men teach, they learn.)」を残した古代ローマの偉人セネカの哲学を思い出しています。しかし、私達は欧州全域に広がった「知」の交わりと同時

に互いに激しく「血」を流し合った歴史も忘れてはなりません。世の東西を問わず、人類の歴史は戦争に溢れています。ここでは詳細に議論することを避けませんが、東アジアの覇権国中国の対外政策から、元寇を除き日本は天下泰平の鎌倉時代や徳川時代を享受し、日本独自の文化を醸成することができました。他方、欧州史を概観しますと、欧州連合(EU)成立まで、現代欧州が体験した2度の大戦をはじめ、長い歴史を通して域内の戦争に加え、内乱やイスラム世界との葛藤も加わり、戦争の合い間に短い平和が顔を覗かせているとの印象を私達に与えます。ナポレオン戦争後に到来した所謂「パックス・ブリタニカ(Pax Britannica)」ですら、欧州域内は比較的穏やかだったとは言え、ギリシア独立戦争、アヘン戦争、クリミア戦争、セポイの反乱等、決して「平和」だと言えた状態ではありませんでした。こうして、古代においてはアリストファネスの『女の平和(Αντιστρατα/Lysistrata)』、近世ではエラスムスの『平和の訴え(Querela pacis/The Complaint of Peace)』、近代においてはカントの『永遠平和のために(Zum Ewigen Frieden)』と、賢者達の願いとは裏腹に欧州の現実世界は極めて血生臭い記録の連続でした。

「不思議な片思い」の関係

「知」と「血」が交錯した歴史を持つ欧州ですが、日本は欧州から多くを学び、時として欧州は日本の憧れの対象となりました。そして現在もその憧れは続いていると考えます。明治日本の近代化は欧州の「知」無しでは実現不可能でしたでしょうし、また日英同盟抜きではロシア帝国の南下政策は阻止できず、我が国は一層の「大量出血」を余儀無くされたかも知れません。そして平和と繁栄を享受する現在、私達の日常生活は欧州ブランド製品に溢れてかえっています。とは言え、私自身はブランド品を身に付ける資格も容姿も持ち合わせておりませんので、裕福で容姿端麗な皆様に欧州ブランドの評価はお任せしたいと思っています。ただ「食いしん坊」の私は

友人と共に、「『フォートナム・アンド・メイソン』の紅茶と食材はやはりロンドンの本店で買わないとだめだ!」と訳の分からないことを語り合っています。さて私が初めて欧州に憧れを感じたのは小学生低学年の頃でした。1966年、サッカーのワールドカップ・ロンドン大会でイングランドが優勝した時に、丁度ロンドンに出張していた父親が街中で騒ぐ人々と一緒に楽しいひと時を過ごしたことを後年語ってくれた時からです。また、1971年来日の英国サッカー・チームのトッテナム・ホットスパーの強さに愕然とし、部屋の壁にはドイツ・サッカーの「皇帝」ベッケンバウアーとビートルズの写真を貼っておりました。そして今では想像もできない位に純真な少年時代、上田敏の『海潮音』を読み、強烈な知的衝撃を受けて欧州文学を読み始めました。

日本の知識人が抱いた憧れを表すものの一つに、民間外交を推進した昭和の政治家、鶴見祐輔が翻訳した『プルターク英雄伝』があります。昭和日本が戦争という暗いトンネルに入りつつある1934(昭和9)年、この訳者は「序」の中で次のように語ります—「このプルターク英雄伝を読む人が、一様に感ずるであろうことは、古代ギリシアと、古代ローマの英雄や哲人たちが、日本の過去の偉人や天才たちと、多くの点において似通っているということである。それは西洋文明の淵源とせられるこれら二大国の国民性と徳操とが、日本のそれと似ているからである」、と。またこの訳者は、ボストン郊外のコンコードに住み、「コンコードの哲人(the Sage of Concord)」と呼ばれた本学出身のエマソンにも言及しています。そして、訳出4年後の昭和13年には長男の俊輔をコンコードの高校に入学させ、翌14年にはハーバード大学で哲学を学ばせております。が、昭和日本はその2年後の昭和16年、欧米の連合国に対して、「鬼畜米英」との敵視政策を採る国に変わります。その時、訳者はどんな気持ちで自らの訳本を眺めていたのか、私には想像することもできません。さて、私達の欧州に対する憧れと比べますと、

欧州の人々の私達日本に対する関心はそう高くありません。勿論、浮世絵、アニメ、ハイテク製品、陶磁器、そして寿司を代表とする食文化等、確かに興味を抱いている人々が次第に多くいらっしゃるようになりました。ただ私が欧州出身の研究者と話しているとき、政治経済社会の分野で、「日本の〇〇は、…」と言及される人々は極めて少ないと申せましょう。換言すれば、日本国内では「欧州では…」と語る人は多くいますが、欧州において「日本では…」という人は極めて少ないと思っております。こうして、日欧関係は或る意味で「不思議な片思い」の関係と言えます。

その理由は、①欧州の人々にとって、日本は魅力が無い、②魅力が有るが、日本の魅力をアピールする人々や媒体が無い、③魅力が有るが、欧州の人々は日本の魅力が何なのか、先入観故に理解できない、或いは何等かの理由で誤解している、以上3つの何れかだと私は考えております。①は確かに存在すると思えます。西洋哲学やキリスト教に関する議論の中に我々が参加する意義と余地は極めて限られています。②はかなり多くの場合で認められると思えます。私自身反省していますが、日本人は英語に比べると、仏独西伊に代表される欧州言語に関しては極端に知識が少なくなります。勿論、これ自体は悪いことではないと思っております。極東に在る日本が欧州言語を必要としてこなかったことは地政学上至極当然のことと申せましょう。ただ、ここで問題にしたいのは、欧州について日本国内で語る方々—時には、「僕は米国より欧州の方が好みに合っている」という方々—のなかに欧州の言葉を話せる方々が非常に少ないことです。この問題は今後、直接的・継続的で双方向の知的対話を行う際、私達は真剣に考える必要があると思えます。*The Gazette* 昨年4月号で、本学に短期留学された中曽根元首相が、「昔は一カ国語でオーソリティーだったけれども、今や二カ国語を使わないと国際派とは言えない」と述べ、ご自身は「心臓英語や心臓フランス語を使っている」ことをご紹

介しました。若く有能な皆様も中曽根元首相の「志」とご努力を学んでみてはいかがでしょうか。そして、欧州における学会や商談を通じ、私達日本の魅力をアピールしてゆこうではありませんか。もっとも、昨年 12 月 16 日付『エコノミスト』誌の記事「彼等は皆英語は話す(They all speak English)」によれば、或るフランス人が英語をグローバル言語として極端に単純化したもの(“Globish”)を創り上げたそうですから、私達は、最低“Globish”、或いはそれ以上の英語で交信能力を高めることこそが先決問題かも知れません。

最後の③は、②の「日本情報が得られない」事態と関連していますが、「日本情報が分りにくい、或いは誤解されている」事態ですから私達の一層の努力が必要です。すなわち、私達は欧州の歴史・文化を学び、欧州の視点から観て日本の主張が分かり易いように主張しなければ、私達の意図と裏腹に一層誤解を招くだけか、それとも理解不能の状態が続くだけです。しかも前述しましたように、欧州は様々な形で「血」を流した経験が多いだけに、話題の選択も、目的・場所・タイミングを注意しなくては、思わぬ形でまったくの「よそ者」になってしまいます。20 年程前、ドイツのライン川沿いを鉄道で移動している時、居眠りしている私を隣に座っていたドイツの紳士が、「さあ、有名なローレライですよ」と親切に起こして下さいました。この方によると、多くの日本人の方々がハイネの「ローレライの歌(„Das Loreley-Lied“)をドイツ語で歌うとのことでした。ご存知の通り、ユダヤ人のハイネはドイツを去り、フランスに亡命します。そしてハイネは、映画『インディ・ジョーンズ/最後の聖戦(Indiana Jones and the Last Crusade)』の中にも出てくる 1933 年 5 月 10 日にベルリンで行われた焚書で対象となった作家の一人となります。この意味で様々な形で評価されるハイネを如何に称えるべきか、親切な紳士や周囲の方々の反応を見て戸惑った記憶があります。また同様の失敗談としてハイデルベルグ大学の研究者との対話の

経験をご紹介します。数年前、ドイツの方とハイデルベルグ大学に近い「哲学者の散歩道(der Philosophenweg)」と京都大学に近い「哲学の道」の話をしていた時、私は軽率にも配慮を欠いて、嘗てはハイデルベルグ大学を代表した大哲学者カール・ヤスパースの話をしてしまい、微妙な形で気まずい思いをした失敗をしました。ご存知の方も多いと思いますが、ヤスパースは夫人がユダヤ人であったため、「ユダヤに汚された („jüdischen Versippung“)」と見做され、1937 年、同大学の哲学教授の地位を剥奪されます。迫害の末、強制収容所に送られる予定日が迫って、準備した青酸カリを手にして自殺を覚悟していたその時、1945 年 3 月 30 日に米軍がハイデルベルグを占領したために間一髪で命拾いをします。戦後、『責罪論(Die Schuldfrage)』や『歴史の起源と目標(Vom Ursprung und Ziel der Geschichte)』等を著しますが、それらを読みますと愚かな大衆心理に振り回された祖国ドイツの運命に対して批判的になり、それが故に晩年、スイスのバーゼル大学に移った大哲学者の心情が悲しく思えてなりません。こう考えますと、私達は欧州の歴史を十分知った上で考えを主張しない限り、時折思わぬ「落とし穴」に陥り、意図せざる形で対話が途切れ、最悪の場合は誤解を招く危険に包まれていることを銘記すべきだと思います。尚、余談ですが、The Gazette の 2004 年 5 月号で触れた通り、作曲家フランツ・レハールは、ヤスパース同様、夫人がユダヤ人でしたが、作品『メリー・ウィドウ(Die lustige Witwe)』が、ヒトラー総統お気に入りのオペレッタであったため、夫婦共々 1930 年代及び世界大戦中、ウィーン及びザルツブルグ近郊の街バート・イシュルで身の安全を保障されました。こうして、この時代に生まれた人々の大切な人生は独裁者の気まぐれによって、いとも簡単に振り回されてしまったと思わず溜息が出ます。

私達の不十分な理解に加えて、小誌昨年 12 月号で触れたように、翻訳に関して厳密には「誤訳」とは言えないものの、価値観の違い

から微妙なニュアンスの差が伝わりにくい場合があります。3年前にパリを訪れた際、私は仏訳版の『草枕』を購入しましたが、山本七平氏も『人望の研究』で言及した通り、「智に働けば角が立つ… (À user de son intelligence, on ne risque guère d'arrondir les angles. . . .)」を、フランス流の論理的思考 (Cartesian thinking) を身に付けたフランスの人に理解して頂くには難しいかも知れません。

憧れと無関心を超えて

中国の台頭や原油価格高騰によるロシアの復活を巡って、国際間の制度調整が重要な問題となっております。また環境問題に関して白熱する米欧間での主導権争いを考えますと、日本は欧州との協調・協力体制を見直し、再編・強化する時期が到来したと言えましょう。こうして私達は従来の憧れに加え、①現実主義に基づく正確で最新の欧州情勢判断、②その判断に基づく日本及び欧州諸国の国益の認識、③適切な国益の認識に基づく戦略的行動が必要となってきたと思います。小誌前号でも申し上げましたが、世界の状況は刻々と変化しております。冒頭で触れたレストラン「コム・シェ・ソワ」の味も例外ではありません。27年間にわたって、『ミシュラン』から三ツ星の栄冠を享受していたこのレストランも、昨年11月末、三ツ星から二ツ星に降格となり、その驚きは大西洋を越えてここケンブリッジにも到達しました。こう考えますと、長い歴史を持つ欧州も「古い顔」と「新しい顔」の2つを持っているが故に、私達は最新情報に注意する必要が有ります。

知的対話とは言わば情報のキャッチボールです。従って私達同様、欧州も19世紀的視点から観れば至極もったもな「欧米至上主義」を捨て、誠意ある態度で臨んで頂かななくてはなりません。確かに近世以降、飛躍的に経済発展を遂げた欧米の社会システムから学ぶ余地は依然として大きいと私は思っています。しかし、大学者 E・H・カーが『歴史とは何

か(What is History?)』の中で、欧米を「世界史の中心として取扱い、他をすべてその周辺として取扱う」見方に対し警告している通り、互いに対等の立場で知的対話をする必要があります。従って、欧州の持つ情報の受発信能力について盲目的に信用することは厳禁です。むしろ彼等の意見を注意して聞きつつ、彼等に対して修正すべき点があるならそれを堂々と主張すべきだと思います。こうして日本と欧州、双方が息を合わせ、「すれ違い」を無くす努力をしてゆくべきだと私は考えます。

The Gazette 一昨年5月号でも触れましたが、政治経済分野で米国に対してライバル意識を剥き出しにするフランスの方々、ほとぼしる愛国心からか、米国の情勢に関して、感情が邪魔をし過ぎて冷静な判断ができなくなっている場合も少なくありません。この意味でフランスは、関心の低い我が国に対してだけでなく、最も関心の高い相手国、米国に対しても「すれ違い」の危険を内包している国と言えましょう。先日、或る本校教授が、昨年亡くなられたフランスの高名なジャーナリストで政治家でもあったジャン=ジャック・セルヴァン=シュレベール氏と約25年前に議論した経験を語って下さいました。セルヴァン=シュレベール氏は、1967年に『米国の挑戦 (Le défi américain)』を、1980年に『世界の挑戦 (Le défi mondial)』を著して世界的に注目された方ですが、米国に対しては余りにも先入観が強く、米国のエコノミストがどんなに冷静に語りかけても頑として意見を変えなかったそうです。こうした「無関心」と「すれ違い」という課題を抱えているものの、愛すべきフランスの人々に私が同情する点は、次第に弱まる彼等の発言力と注目度です。台頭する中国に関して、小誌昨年11月号で、中国改革フォーラムの鄭必堅理事長の言葉「中国の平和的台頭(中国和平崛起/China's Peaceful Rise)」に触れました。2003年11月にこの言葉に注目した一部の専門家を除き、多くの人々は、鄭理事長が米国『フォーリン・アフェアーズ』誌2005年9/10月号に発表した小

論を巡って議論を始めました。しかし、2003年11月の博鳌(ボアオ)アジア・フォーラムでの鄭理事長の講演と翌12月のハーバード大学における温家宝首相の講演に関する報道を除けば、主要紙としてこの「平和的台頭」を簡単に紹介したのは、2004年2月の英国『ザ・タイムズ』紙、3月末の米『ニューヨーク・タイムズ』紙でありました。ところが、フランスの『ル・フィガロ』紙は、最も早い時期、すなわち、『フォーリン・アフェアーズ』誌よりずっと早い時期(2004年3月20日)に、鄭理事長ご自身の意見を翻訳し、同紙に掲載しています。こう考えますと、たとえ真っ先に発信された詳細情報であっても、政治経済分野で国際共通語(the lingua franca)の地位を失ったフランス語で表記された情報ならば人々は注目しないと私自身驚いております。約百年前の1905年、日露戦争終結を約したポーツマス条約では、英語よりも優先されたフランス語も21世紀を迎えてその美しい言葉がその魅力を十分発揮できる分野は、美味しいお料理とワイン、そしてフランスの哲学及び芸術だけかと、フランス寄りのコスモポリタンである私としては少し寂しく感じております。

昨年末、イスラエルに向うフライトの中で隣合わせた同国のビジネスマンは、「欧米人は理解できるが、極東の人は理解し難い」と語りました。その一方で、私の講演会に参加した同国のビジネスマンのなかには、「結局は同じ人間だ」と仰って下さった方が多くいました。3時間にわたる細かい統計や日本の制度の解説を終え、講演の最後の時間に、私はユダヤ教・キリスト教で言及される『ベン・シラの知恵(The Wisdom of Ben Sira)』の英訳版から共感する箇所を示して語りました。そして聴衆の顔を見つつ、私は人種・国籍・宗教にかかわらず、「志」を共有できる「ヒト」が必ずいることを確認できたような気がします。従って、互いに共通する価値観を確認すると同時に異なる価値観の存在を認め、互いに尊敬し合う精神を築きあげて知的対話の姿勢を堅持することこそが、将来の世代に対す

る私の責任であると感じた次第です。

4. 編集後記

「栗原後悔日誌@Harvard」3月号の本文は以上です。3月中旬、私は国際経済研究所(IEE)のアダム・ポーゼン氏や、ドイツ出身で国際通貨基金(IMF)のヨルグ・デクレッシン氏と共に日独経済について議論する予定です。米中経済とは対照的な形で、近年注目度が低かった日独両国について面白いと評価される知的対話を自らが楽しみつつ行うつもりです。さて、フランス料理の名シェフ、村上信夫氏が著した『帝国ホテル厨房物語 私の履歴書』を読み、平和と繁栄の時代に生まれた自らの幸運を噛み締めています。第2次世界大戦中、フランスの料理と言語で武者修行中だった村上氏は中国の済南で目を負傷されますが、手当した軍医が偶々眼科医であったという幸運に恵まれました。生死を別ける大混乱の戦場では、専門の医師に診てもらえて、更には適切な処置を受けられること自体が奇跡だったに違いありません。その奇跡のお蔭で、私達は、戦後、パリのリッツで修行を積まれた村上氏の美味しいフランス料理を頂戴することができました。The Gazette 昨年1月号で触れた辻静雄氏を含む先人の努力で日本のフランス料理は世界で超一流となりましたが、そのお蔭もあってか日本料理の調理師達も良い刺激を受け、一層美味しく、また工夫のされた日本料理を創作できたことでしょう。こうした考えから私はグローバルな形で各々の長所を伸ばし合う世界を望んでやみません。

以上

編集責任者	
栗原 潤	Jun KURIHARA
ハーバード大学	Senior Fellow,
ケネディ・スクール	John F. Kennedy School of Government,
シニア・フェロー	Harvard University
連絡先	
Mailing address:	79 JFK St., M-RCBG, Cambridge, MA 02138
Office address:	124 Mt. Auburn, Cambridge, MA 02138
Tel:	+1-617-384-7430; Fax: +1-617-495-4948
Email:	Jun_Kurihara@ksg.harvard.edu; JunKuri@aol.com